

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04752

研究課題名（和文）ペアでの美術鑑賞による「他者性の対話」の研究

研究課題名（英文）A Study on the 'Dialogue of Otherness' through Art Appreciation in Pairs

研究代表者

佐藤 哲夫 (Sato, Tetsuo)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：90187211

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：「他者性の対話」という考え方を基底に持つ対話による鑑賞教育の必要性と可能性を、理論検討とペアでの美術鑑賞実験による実証研究から明らかにした。

理論検討では、レヴィナスの他者論等を考察し、他者である作品と「私」の特別な関係という超越の倫理的次元があり、鑑賞教育はこのことを重視する必要があることが明らかになった。実験による実証研究では、「他者性の対話」が生起する可能性があることを確かめることが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年美術教育における鑑賞教育では対話型の鑑賞が行われることが多くなっているが、そこで一般に目指されているのは、鑑賞の知識・能力の伸長である。本研究で追究した「他者性の対話」による鑑賞は、こうしたリテラシーとしての鑑賞観と鑑賞教育観に代わるものである。そして、対話による鑑賞の「対話」を、自分以外の者（＝他者）との話し合いという常識的な捉えではなく、他者性の対話（＝超越論的他者との関係）として理解しようとした点にある。「他者性の対話」は、超越や二人称的倫理に関わり、知識・能力の守備範囲を超えたものである。この見方は、鑑賞教育の理論と実践の両面に根本的な変革を求めるものである。

研究成果の概要（英文）： The necessity and possibility of appreciation education through dialogue based on the concept of 'Dialogue of Otherness' were clarified through theoretical examination and empirical research through paired art appreciation experiments.

In the theoretical examination, it was revealed that there is a transcendent ethical dimension of a special relationship between the 'other' work and 'I' by examining Levinas' theory of others, etc., and that appreciation education needs to emphasize this. In the empirical research through experiments, it was possible to confirm that there are cases where 'Dialogue of Otherness' occurs.

研究分野：美術教育学

キーワード：鑑賞教育 他者 対話 レヴィナス 超越 二人称 鑑賞 他者性

### 1. 研究開始当初の背景

(1)美術教育における鑑賞の重要性は実践レベルでは未だ十分でないにしても理論としては広く共有されている。しかし教育方法が旧来の一方的な知識の教え込みでは、鑑賞に不可欠な自分の目で楽しむ力が十分に育たないことから、主体性に焦点を当てた対話型鑑賞に注目が集まっている。対話型鑑賞では、自分の目で見、見えるものについて考え、解釈し、それを言葉で表現して他者に伝えること、更には対話による他者との学び合いが重視される。しかし、こうした主体性と対話による学びの対話型鑑賞も、知識の獲得のされ方や何についての知識かという知識内容が再検討されているのであって、目標とされているのは知の獲得である点では旧来の鑑賞と共通しているといえる。

(2)しかしこの共通理解は受け入れるべきなのだろうか。美術鑑賞の根源は、果たして「認識」なのだろうか。また、認識がなければ、単なる陶醉や自己満足であり真の鑑賞ではないことになるのだろうか。筆者は以前、鑑賞ではなく表現についてではあるが、描画における創造性が、想像よりもむしろ対象のアフォーダンスの知覚であると考えられるとする研究を行った。生態心理学でいうアフォーダンスとは、主体にとっての対象の意味すなわち認識である。しかしその後、『全体性と無限』等の著作でレヴィナスの他者論に触れたことで、このような見方は、物や物的にあつかわれた対象に対してのみ有効で、他者性の他者に対しては無効ではないかと考えるようになった。

### 2. 研究の目的

研究目的は、対話型鑑賞法が前提としているリテラシー能力としての鑑賞観と鑑賞教育観の問題点を対話概念を鍵に検討し、それに代わる「他者性の対話」を基底に持つ対話型鑑賞教育の必要性と可能性を、理論と実験の両面から明らかにすることである。現行の対話型鑑賞の問題点は、話し合い活動の対話が、本質的には主体還元的な認識活動へと方向づけられていることである。対話の基底にダイアログとしての「他者性の対話」が確立されていなくてはならない。しかし対話は、相手との間だけに限られるものではない。作品との対話、さらに自分との対話も、他者との出会いという「他者性の対話」に向けて開かれていることが重要である。こうした鑑賞の在り方は、現代哲学の理論的な考察によって明らかにされる必要があり、それと同時に実験に照らしても検証する必要がある。

### 3. 研究の方法

研究は大きく二つの部分に分かれている。一つは、対話型鑑賞に関わっている対作品と対相手の二つの関係を究明しようとする理論研究の部分である。もう一つは、理論から導かれた関係を、ペアでの美術鑑賞実験を通して検証する実験調査の部分である。理論研究の部分では、レヴィナスなどの哲学的他者論と美術鑑賞の関わりを、文献研究により行った。

また実験調査の部分は、中学生を対象としたペアでの美術鑑賞の実験を、鑑賞の実像を捉えるために多角的に様々なバリエーションで実施し、観察と記録を基に対話による鑑賞を記述し、分析・考案した。

### 4. 研究成果

(1) 対話型鑑賞法が前提としているリテラシー能力としての鑑賞観と鑑賞教育観の問題点を対話概念を鍵に検討し、それに代わる「他者性の対話」を基底に持つ対話型鑑賞教育の必要性と可能性を、理論面から明らかにすべく、哲学的他者論と美術鑑賞との接点について考察し、まずレヴィナスの芸術についての考えはどのようなもので、彼の哲学の根幹である他者論とどのように関わっているのかを探った。また、レヴィナスの「他者」についての思考が、鑑賞の問題にどのような意味を持つかを論究した。鑑賞教育においては、鑑賞はよく「作品との対話」とされるが、この場合の対話の相手は誰(何)なのかというがある。また、対話型鑑賞の「対話による鑑賞」における相手は誰なのかという問題がある。この二つの局面での相手は、レヴィナスの「顔」としての「他者」と考えられるかという事である。

レヴィナスの他者論については、ある(II y a)からの逃走 主体の存在への緊縛 他なる他者 顔である他者、という4つの視点からその特徴を捉えた。また、レヴィナスの芸術論については、芸術作品は「他者」足りうるのか 芸術はイメージ(表象)である(前期芸術論1) 芸術のリズム批判(前期芸術論2) 芸術は「享受」である(前期芸術論3) 後期芸術論 という視点からその輪郭を明らかにした。美術鑑賞を作品との「対話」であるとし、対話の相手である作品とはレヴィナスの言うところの「他者」であり「顔」であるということは、直ちに断言すると言うことまでは出来ないまでも、大きな可能性を持った見方であるとの結論を得た。

(2) 倫理学者のステューヴン・ダーウォルの、「二人称的観点」こそが道德の基礎とする理論に注目し、二人称的観点と対話による鑑賞の関係を、ペアによる鑑賞の調査実験によって調べた。対象者は、3組(延べ6組)の中学生ペアである。実験は、話し合うテーマの提示も無いままに

二人だけで、一つの絵画作品を前に 30 分間、作品を見ながら自由に会話してもらおうというものであった。

対話による鑑賞では、対話は、一緒に鑑賞する相手との対話と、向き合う作品との対話の二つの対話が含まれている。作品を前にしてペアで話し合う時、生徒は相手への気遣いと下心のない誠実な率直さがお互いに要求されていることを理解している。二人だけの会話は相手に宛てられており、第三者の誰かに向けられたものではない。しかし、ペアでの鑑賞においては、生徒は相手と向き合う事と、作品と向き合う事の二つの行為を繰り返すことになる。芸術作品の鑑賞が、作品との「二人称的観点」に立った対話であるなら、その対話は、もう一方の生徒と作品の対話とは、意味内容が根本的に異なるが、それぞれの対話の経験について、ペアの二人はどのように話すのか。あるいは話さないか。そもそも準人格である作品との対話は、今の中学生にも成立するのかを調べた。

その結果、「二人称的観点」に立った作品との対話は、一組のペアの二回の鑑賞において見出されたが、残りの二組のペアには見出せなかった。また、前者のペアについても、お互いの鑑賞内容の一致や共感が際立ち、差異や隔たりの部分があり見出せなかった。この実験から分かったことは、ペアの対話はどの場合も二人称的観点を含んだ他者の性格を持っていたものの、作品との対話は、他者との対話が行われる場合もある一方、作品を単なる対象物として見做す場合もあるということである。

(3) 鑑賞での対話の様相をさらに詳しく探るために、細かい改良を加えて再びペアによる自由鑑賞の実験を行った。この二回目の実験で、鑑賞する絵として被験者の三組のペアが選んだのは、エドヴァルド・ムンク《声/夏の夜》1896年、ヴィルヘルム・ハンマースホイ、《ピアノを弾く妻イェダのいる室内》1910年、ピーテル・ブリューゲル(父)オリジナルの模写とされる《イカロスの墜落のある風景》1560年代であった。そして、今回は、単になされた対話から作品の他者性に触れていると思われる要素を抽出するだけでなく、ペアの対話の内容と質の分析を行った。分析からは 対話では「テーマ」の追究が行われた 絵の表現に示された意図を見つけ出そうとしている 自分が見方の伝達、相手の傾聴、見方の深化発展、そして共有が見られた 対話が鑑賞を賦活し、他者との共有が生まれた、 といった内容が取り出された。ここから、次のような鑑賞対話分析の指標を示すことが出来た。「伝えたいことは何か」ということが対話において最も重要である 自分の「テーマ」があるか おしゃべり(モノローグ)と対話の違い(相手(他者)の有無) 事実質問か「なぜ」「どうして」か(鑑賞対話の質問は、形式的には相手の行為への質問ではなく、絵についての質問である。しかし、絵を見ること、感じることは、鑑賞という行為である。)

対話論の理論的検討に関しては、対話型鑑賞論や前回の他者性対話論以外の、具体的な対話論にも対話とは何かを考えるヒントが見つかるかもしれないという考えから、様々な目的を持った実践的な対話論(方法論)の検討を行った。一つ目は、フィンランドで行われている、統合失調症に対する治療のための新しい手法である「オープンダイアログ」である。この手法は、医療を超えた日常生活における人間関係に関わった問題への有効性にも関心が集まっている。二つ目は、中田豊一、和田信明等による「対話型ファシリテーション」である。これは「メタファシリテーション」とも呼ばれるものである。三つ目は、細川英雄の対話の技法ではなく対話の内容に意識を向けるべきだとする対話論である。

これらの、実践的対話論の考察と鑑賞対話の分析の結果として7つの鑑賞対話の視点を得た。作品を観ながら自分との関わりを探る そのためにもファシリテーターを含む他者の支援が役立つ その見つけた事を伝え返し合い対話しながら作品理解を共有する 対話者同士は、ヒエラルキーが無い方が良い 教師-生徒等では、対話型ファシリテーションの有効性が期待される 鑑賞対話では、自己理解、他者理解、作品理解が相互に関わりながら同時に起こる 鑑賞対話は、孤独な鑑賞に潜在する対話の契機を、他者や社会との関係構築に向かって解き放つもの、である。

(4) 対話による鑑賞教育において、超越的次元をどう捉えるべきかの研究を行った。

現行の学習指導要領を見ても、「超越的次元」についてのどのような態度を取るかという問題は残されたままである。

鑑賞教育における鑑賞は、通常、自己の意識と能力によって実現されるものであると理解されている。このような「資質・能力」を養うのが鑑賞教育であると考えられている。しかし、芸術である作品は、鑑賞者の認識力で覆い尽くすことは不可能である。この事態を「芸術作品>鑑賞者の認識力」と解釈するなら、この関係は、不等号記号によって比較計量可能な項同士の関係であることも含意していることになる。芸術作品の超越的次元とは、この不等号による表現が不可能な関係のことである。そうした超越的次元は、やはり、わからない「謎」として感じ取られるのではあるが、形のない謎であり、疑問形としてネガティブな陰画で指し示すことができない。いわば、その存在も謎であるような謎である。

存在を明示し、科学的に実証することもできない超越について、公教育の場で語ることは許されることなのだろうか。想起されるのは、公教育における宗教教育の扱いである。芸術と宗教の間には、近代以降の両者の分離が進んだ後でも、なお通じ合う関連があるように思われる。エチエンヌ・スーリオとブランクーシを論じたエリアーデの著作から、芸術の超越性的一端を明らか

にした。

教育基本法に立脚すると、宗教教育の価値を全否定はしないが、宗教教育の必要性も明言できない実情が、結局は非宗教教育と反宗教教育の推進を結果しているのと同様に、美術における超越的次元を否定した内在の美術観と美術教育の推進を結果することになっている。しかし、「無限」や「他なるもの」といった「外」との関係を完全に絶てば、それは美術の否定になる。

(5) 三つ目の実験として、私 について語る対話による鑑賞授業についての授業実践を行い考察した。パウル・クレーの作品とテキストを用いて、一義的な理解を拒む「難解さ」を梃子に、対話を通して解釈の多様性にふれることを意図した実践を行い、これまでのいわゆる対話型鑑賞にはなかった、わからない「謎」を焦点とする新しい理念の鑑賞教育の示唆を得た。

(6) 他者 との対話としての超越論的鑑賞教育の可能性を探る研究を行い、「他者 との対話としての超越論的鑑賞教育の可能性」として発表した。

レヴィナスの 他者 の思想を中心に参照しながら、通常の鑑賞教育が目指す鑑賞とは異なる、超越である 他者 との出会いと対話としての鑑賞と教育の可能性を検討した。鑑賞することは、一般的にも学習指導要領においても、作品を感覚や感性で受け取るという受動性と、作品を理解し、さらには価値評価する能動性の、主体と対象の往還を通じた総合として捉えられている。実際は、感覚や感性といえどもノエシス-ノエマとしての意識の志向性による対象の構成であると考えられる。いずれにしろ、これまで鑑賞は、常に認識論の枠組みで考えられてきた。この認識である鑑賞は、同時にレヴィナスのいう「享受」というあり方に通じている。これは、作品を支配し「同」とする行為でもある。しかし、他者 である作品と「私」の特別な関係という超越の倫理的次元があり、鑑賞教育はこのことを無視してはならないことを論じた。

#### (7)研究成果の総括

対話型鑑賞法が通常前提としているリテラシーとしての鑑賞観と鑑賞教育観に代わる「他者性の対話」を基底に持つ対話による鑑賞教育の必要性と可能性を、レヴィナスの他者論等の理論的検討とペアでの美術鑑賞実験による実証研究の両面から探った。理論的検討からは、超越である

他者 との出会いと対話としての鑑賞と鑑賞教育の概念が明確化された。鑑賞することは、一般的にも学習指導要領においても、作品を感覚や感性で受け取るという受動性と、作品を理解しさらには価値評価する能動性の、主体と対象の往還を通じた総合として捉えられている。実際は、感覚や感性といえどもノエシス-ノエマとしての意識の志向性による対象の構成であると考えられる。いずれにしろ、これまで鑑賞は、常に認識論の枠組みで考えられてきた。この認識である鑑賞は、同時にレヴィナスのいう「享受」というあり方に通じている。これは、作品を支配し「同」とする行為でもある。しかし、他者 である作品と「私」の特別な関係という超越の倫理的次元があり、鑑賞教育はこのことを重視する必要があることが明らかになった。実験による実証研究では、「他者性の対話」が生起する可能性があることを確かめることが出来た。ペアでの対話の美術鑑賞実験の基本型は、中学生ペアで行い、最初に一つの作品をそれぞれが単独で鑑賞した後、今度は二人でさらに対話しながら作品鑑賞することである。これに作品の鑑賞者による選択、作者によるテキストを作品に付加、グループでの鑑賞、生徒と教師のペアによる鑑賞対話等の実験を行った。そして対話の中に、「他者性の対話」(ダーウォル「二人称的観点」)が含まれるかどうかを探った。ペア同士の対話は、どの場合も二人称的観点を含んだ他者の性格を持っていたものの、作品との対話(鑑賞)は、他者性の対話が行われる場合がある一方、作品を単なる対象物として見做す場合もあることが明らかになった。

本研究の位置づけとインパクトとしては、対話による鑑賞の「対話」を、自分以外の者(=他者)との話合いという常識的な捉えではなく、他者性の対話(=超越論的他者との関係)として理解しようとした点にある。この見方は、鑑賞教育の理論と実践の両面に根本的な変革を求めるものである。しかしながら、本研究によって超越としての「他者性の対話」が科学的検証で実証出来たかという点、そうとまでは言えない。どうしても思弁的な性格を帯びてしまうのは避けられなかった。確証は、美術教育の実践者が、対話による鑑賞の実践の中で「他者性の対話」を見出せたと感じられる場面との遭遇の体験を通して得るしかないのかもしれない。教育実践者の多くの報告が求められる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>佐藤哲夫, 小林季恵, 藤本優希                       | 4. 巻<br>14            |
| 2. 論文標題<br>私 を語る対話による鑑賞授業の実践と考察                  | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編                  | 6. 最初と最後の頁<br>49-72   |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>佐藤哲夫                                   | 4. 巻<br>54            |
| 2. 論文標題<br>他者 との対話としての超越論的鑑賞教育の可能性               | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>大学美術教育学会「美術教育学研究」                      | 6. 最初と最後の頁<br>137-144 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                   | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>佐藤 哲夫                                  | 4. 巻<br>12            |
| 2. 論文標題<br>中学生ペアの絵画鑑賞における「対話」の分析と考察              | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編                  | 6. 最初と最後の頁<br>215-220 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>佐藤 哲夫                                  | 4. 巻<br>10-2          |
| 2. 論文標題<br>鑑賞教育における 対話 の相手は誰か レヴィナスの他者論と芸術論からの考察 | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>新潟大学教育学部研究紀要                           | 6. 最初と最後の頁<br>489-494 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)           | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>佐藤 哲夫                        | 4. 巻<br>15-2          |
| 2. 論文標題<br>生徒 - 教師ペアでのメール交換による美術鑑賞対話   | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>新潟大学教育学部研究紀要                 | 6. 最初と最後の頁<br>261-274 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

|                             |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名<br>佐藤 哲夫            |
| 2. 発表標題<br>超越的次元に関わる鑑賞教育と対話 |
| 3. 学会等名<br>大学美術教育学会         |
| 4. 発表年<br>2020年             |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>佐藤 哲夫             |
| 2. 発表標題<br>実践的対話論の考察と鑑賞対話の分析 |
| 3. 学会等名<br>美術科教育学会           |
| 4. 発表年<br>2020年 ~ 2021年      |

|                            |
|----------------------------|
| 1. 発表者名<br>佐藤哲夫            |
| 2. 発表標題<br>ペアによる自由鑑賞の分析と評価 |
| 3. 学会等名<br>美術科教育学会         |
| 4. 発表年<br>2019年            |

|                                |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名<br>佐藤 哲夫               |
| 2. 発表標題<br>現代における美術鑑賞の課題とレヴィナス |
| 3. 学会等名<br>第56回 大学美術教育学会「広島大会」 |
| 4. 発表年<br>2017年                |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|